

『古今和歌集』

春歌上 二七〜二九番歌

【二七番歌】

西大寺の辺の柳をよめる

僧正遍昭

浅緑いとよりにかけて 白露を珠にもぬける春の柳か

〈校異〉

・柳か：あおやき（筋切・元永本・教長注古今集・家長本・前田家本・穂久邇文庫本・天理図書館本・顕昭注）

長本・前田家本・穂久邇文庫本・天理図書館本・顕昭注）

天理図書館本・顕昭注）

〈語釈〉

・西大寺の辺

嵯峨天皇の時（延暦一五年）朱雀大路南端の羅

生門外に東寺と西寺を建てたが、西寺は現存しな

い。（『新全集』）

・浅緑

薄い緑のこと。（『片桐全評釈』）

薄緑色の。糸・野辺などの枕詞する説もある。

（『新全集』）

・いとよりにかけて

細い柳を糸にみたてた。（『新大系』）

〈通釈〉

西寺あたりの柳を呼んだ歌

僧正遍昭

うす緑色の糸をよりあわせて白露を玉のように貫き通

している春の柳だなあ

【二八番歌】

題しらず

読み人しらず

もゝちどりさへずる春は 物ごとにあらたまれども

我ぞふりゆく

〈校異〉

・さへずる：なくなる（筋切・六条家本・家長本・前田家本・穂久邇文庫本・天理図書館本・雅俗山荘本）

田家本・穂久邇文庫本・天理図書館本・雅俗山荘本）

図書館本・雅俗山荘本）

〈語釈〉

・もゝちどり：古今伝授三鳥（百千鳥・呼小鳥・稲負鳥）の一つここでは数多くの鳥『万葉集』に一例みえる。

○ わが門のえ榎の実もりははむ百千鳥千鳥は来れど君

ぞ来まさぬ

『万葉集』（一六・三八七二）

○ 声たえすさへつれのへの百千鳥残りすくなき春にや

はあらぬ

『後拾遺和歌集』春下（一六〇）

○百千鳥声のとかにて遠近の山はかすめる春の日くらし

『玉葉和歌集』春歌上（二五）

○百千鳥なく声すなり我宿の園の梅かえ今さかりかも

『玉葉和歌集』雑歌一（一八六二）

○百千鳥さえつる春の浅みとり野への霞にほふ梅かえ

『風雅和歌集』春歌上（一八六二）

〈通釈〉

たくさんの鳥がさえずる春は、すべてのものが新しく

なつてゆくけれども私だけが年おいてゆくことだ

【二九番歌】

をちこちのたづきも知らぬ山に おぼつかなくも呼小

鳥かな

〈語釈〉

・をちこち：遠い所と近い所。将来と現在。

・たづき：手がかり。手段。方法。たより。

・呼小鳥：万葉集には九例みえる

○大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びて越ゆな

る 『万葉集』雑歌（一・七〇）

○滝の上の三船の山ゆ秋津辺に来鳴き渡るは誰呼子鳥

『万葉集』雑歌（九・一七一一）

○神奈備の磐瀬の森の呼子鳥いたくな鳴きそ我が恋まさ

る 『万葉集』春雑歌（八・一四一九）

○世の常に聞けば苦しき呼子鳥声なつかしき時にはなり

ぬ 『万葉集』春雑歌（八・一四四七）

○我が背子をなこしの山の呼小鳥君呼び返せ夜のふけぬ

とに 『万葉集』春雑歌（十・一八二二）

○春日なる羽易の山ゆ佐保の内へ鳴き行くなるは誰呼小

鳥 『万葉集』春雑歌（十・一八二七）

○答へぬにな呼びとめて呼小鳥佐保の山辺を上り下りに

『万葉集』春雑歌（十・一八二八）

○朝霧にしのに濡れて呼子鳥三船の山ゆ鳴き渡る見ゆ

『万葉集』夏雑歌（十・一八三二）

○朝霧の八重山越えて呼子鳥鳴きや汝が来るやどもあら

なくに 『万葉集』春雑歌（十・一九四一）

○我宿の花になゝきそよふことりよふかひありて君もこ

なくに 『後撰和歌集』春歌中（七九）

○なかめつゝ人まつよひのよふこ鳥いつかたへとか行か

へるらん 『後撰和歌集』恋歌五（九四三）

○我背子をならしの岡のよふこ鳥君よひかへせ夜のふけ

ぬ時 『拾遺和歌集』恋三（八一九）

○こぬ人をまちかね山のよふこ鳥おなし心に哀とそきく

『詞花和歌集』春（四六）

〈通釈〉

あちらこちらと見当もつかない山の中で心もとなくも

（人を）呼ぶ呼子鳥だなあ

古今伝授における三鳥は、平安期のいつからか実体のないもの、解釈不明のものとされてはいるが、万葉期における詠歌状況と、その後の勅撰和歌集との比較において、三鳥の意図するところは形骸化しており、『古今集』をひとつの規範として、和歌がある種の形式となっていることをあらわしているのではないだろうか。

また、「呼子鳥」を「かつこう」とする説もあるが、「かつこう」は夏の鳥であり、『万葉集』からの例歌をみるかぎりにおいて、春歌六首、夏歌一首と圧倒的に春に歌われていること、そして『古今集』の配列からも「かつこう」とするのは妥当ではないだろう。

### 【配列】

あおやぎの糸

浅緑いとよりかけて

糸2首

あさみどり、↓もゝちどり、  
たまにもぬける↓あらたまれども

(言葉でつないだものか)

もゝちどり

呼小鳥

鳥2首

ここでの配列において、二七番歌二八番歌の断絶があるように思えるが前期の指摘にあったように、言葉の韻でつないだものであろうか。

### 参考文献

- 『古今集校本』 笠間書院
- 『新日本古典文学大系 古今和歌集』 岩波書店
- 『日本古典文学全集 古今和歌集』 小学館
- 『古今和歌集全評釈』 講談社

### 古今伝授とは

古今伝授に関する難解な語句を口伝・切紙・抄物によって、師から弟子へと秘説として継承するものであり、このことは歌学の確立が『古今集』を絶対的権威としてとりあつかうことによつて、秘伝となされたものであろう。

すなわち平安末期にもなると、『古今集』を解釈するのにあたり解釈不明の語句もあるのは当然であり、そのために注釈が必要となる。これらは俊成・清輔(六条家)などの専門歌人によつて解釈なされ相伝していく事となる。

鎌倉時代にもなると承久の乱(一二二一)は御子左家の歌道としての権威の確立、また弘安十年(一二八七)の皇統の迭立は二条・京極両家の対立をもとに展開していくわけであり、その後の十三代集は権力闘争における政争の道具としての側面を備えているわけであるが、主題がそれるのでひとまずおいておき、古今伝授における三鳥三木に触れていきたい。

三鳥三木とは『古今集』における古来不明とされてきた部分で、三鳥とは今回の該当部分の「もゝちどり」「呼小鳥」と「いなおほせとり」(二〇八)、三木とは「おがたまの木」(四三二)「めどに削り花」(四四五)「かはなぐさ」(四四九)の事を指し、古来さまざまな解釈がなされてきた。

これらは『古今集』における秘伝として伝えられ、三木は物の名の部立てということもあり、とくに三鳥が尊重されてきた。古今伝授の解釈に柿本人麿を歌聖と見立て三鳥を天・地・人とし、政治的部分と密接に関連づけて解釈している。このことは『古今集』の絶対的権威化がもたらしたひとつの穿った見方ではあるわけだが、なぜこのような解釈が生まれたかを考察するならば、先ほどの歌学の分裂と十三代集が政治との密接なかわりを関連をも含めて勅撰和歌集が国家的事業を担っていたあかしであろう。

### 参考文献

- 『古今集・新古今集の方法』 笠間書院
- 『中世歌壇史の研究』 明治書院